

一一 日本の朝鮮語學と朝鮮の日本語學

一 日本 の 朝鮮 語 學

上古の事は遡として語るべからず、日本に於て公に朝鮮語を學習せしめたのは、淳仁天皇天平寶字五年美濃武藏兩國より二十人づつの少年を選抜して新羅語を研究せしめた(續日本紀)のや、嵯峨天皇弘仁六年對馬に新羅譯語を置いた(日本後紀)などが先づ古い方であらう。其の後日本と朝鮮との外交は左程重要な關係を保たなかつたので、日本に於ける朝鮮語研究は一時頓挫の運命に陥つた。然るに壬辰の役起るに及び痛切に通譯の必要を感じ、多く之を對馬に徴することになつた。蓋し對馬の地たる日鮮兩國の間に介在し、其の住民は上古より常に朝鮮の地にも往來し、島主宗家の如きも明治の初年に至るまで朝鮮に對する日本外交の取次をなすの特權をさへ與へられて居た。斯くの如く對馬と朝鮮とは唇齒輔車の關係を保つて居たので、同島に於て朝鮮語の研究せらるゝことは自然の勢

といはねばならなかつた。前述の如く古く嵯峨天皇の御宇該島に新羅譯語を置かれた事實は別とするも、壬辰役以後該島に於ては一般の人民すら朝鮮語の如何なるものなるかを多少理解するものあつたらしく思はれる節がある。それは次の如き記事を見たならば思半ばに過ぐるものがあるだらう。

「對馬島對馬州管二郡、(中略)其女子多着我國衣裳、而其男子幾解我國言語、稱倭國必曰

日本云々」(亂中雜錄)

「自平時擇島中童子之伶俐者、以教我國言語、又教我國書契簡牘之低仰曲折云々

(同前)

勿論徳川時代に於ける朝鮮語學者中には新井白石等の如く常に江戸に住せる人もあつたが、實用上の朝鮮語學研習は矢張り對馬に限られて居たやうである。康熙二十一年の著にかゝる洪禹載の日本差遣旅行記「東槎錄」中には、對馬に於ける日本通事の姓名を十七八名も掲げて居るのを見ても一般を知ることが出来る。殊に對州候に仕へ、該島の政教に功績のあつた雨森芳洲の如きは、對馬が生んだ日本屈指の朝鮮語學者(實用、理論の何れより見るも)といはねばならぬ。要

するに日本に於ける朝鮮語學は古來對馬の專賣特許と稱するも毫も過言でないのである。茲に日本の朝鮮語學を述べんとするに當り、其の内容の自ら對馬に於ける朝鮮語學に止まらねばならぬに至つたのは、亦已むを得ざるの事情に出でたのである。

壬辰役後二十餘年を経て對馬に始めて大通詞なる職名を置き、江口金七、加瀬傳五郎の兩人が之に任せられ、朝鮮語通譯のことに當つた。其の後徳川の末期に至るまで大した變遷が無かつたやうであるが、茲に最後に明治の初年頃に於ける對馬の朝鮮語研究の有様を述べて本節を終へようと思ふ。

明治維新に際し、宗重政外務大丞に任せられたが、明治三年に至り我が國と朝鮮との外交は宗氏の手を離れ、外務省が直接交渉することとなつた。明治五年森山茂、廣津弘信氏が權大丞として對馬に來るや、對馬に於ける朝鮮語學の必要を感じ、今の嚴原町光清寺の在る所に語學所なるものを設立し、從來の通事を教師として毎日朝鮮語を學習せしめた。而して其の生徒たる多くは通事の子弟で、恰も世襲の如く、其の數十名許りも居た。然るに明治六年從來の世襲的學生の外に

士族の子弟十五名程新に入學することとなつた。當時通事と稱するものの中には大通事、五人通事、通事といふ階級があつて、大通事こそは士分として帶刀を許され、威張つても居たが、五人通事、通事に至つては、身分が低く、世人からも餘り尊敬せられて居なかつた。然るに此の時に至り士族の子弟が入學を希望するに至つたので、世間では之を奇異に感じ、又從來の生徒からも自分等の領域に足を踏み込むものとして大いに不平を申込まれた。併しながら大勢は既に如何ともするを得なかつた。教科書と稱すべきものも別に無かつたので、「交隣須知」や「隣語大方」の如き書を各自に筆寫して勉強した。然るに其の後半歳にして嚴原の語學所は廢せられ、二十四五名の在學生中士族出身の者だけが留學生として釜山に派遣せらるゝこととなつた。釜山に於ける語學所は明治十三年頃まで存し、當時の語學教師は皆朝鮮人であつた。熊本でも早くから京城に留學生を送つたが、それは明治十年頃が初まりで、對州よりは少しく後になるのである。

二 朝鮮の日本語學

朝鮮が正式に外國語學習の機關を設けたのは弓裔泰封の時史臺といふもの

留學生

朝鮮の日本語學
 留學生
 文藝

通文館

明譯院

日本研學は
太宗頃より
學習せらる
四學

を置いたのが(三國史記)初であらう。尤も其の以前とても此の種の機關があつたかも知れぬが、文献の上からは之を明かにすることが出来ぬ。高麗に至つては太祖の時學校を起し、光宗九年には雙冀の言を用ひて始めて科擧の制を設けた。其の試験法などは諸書に散見して居るが、直接語學に關するものとは見えて居らぬ。忠烈王二年には通文館なるものが設けられ、語學を學習せしめたが、それは漢語のみに限られて居たらしい。降つて李氏朝鮮に至り、太祖二年に司譯院なるものを置き、譯語を掌らしめたが、それも設置當時は漢語のみを教授したものである。然るに其の後幾くもなくして蒙學蒙古語が加へられ、太宗頃には倭學(日本語)、世宗頃には女眞學(女眞語)が加へられ、茲に始めて所謂四學が完成し、此の四學の名稱は永く後世にも及ぶやうになつたのである。彼の『經國大典』には明かに漢、倭、蒙、女眞の四學を規定してある。唯女眞學は康熙年間に至り、清學即ち滿洲語を以て置き換へられたことは、既に前にも述べた通りである。此等の變遷は更に詳説を要するのであるが、茲ではこれだけに止めて置く。

司譯院の職員の重なるものとしては、『經國大典』以來、『大典會通』に至るまで都提

一一 日本の朝鮮語學と朝鮮の日本語學

調提調等の外、日本語學に關するものとしては、倭學訓導二名で始終した。尙ほ六典條例に従ふと、此等の外に譯講及び公事の通塞を掌るものとして、散員訓上堂上が漢學に六名、清學に二名、蒙學に一名、倭學に三名置かれたとある。又外官職として、は「經國大典」には倭學訓導が釜山及び薺浦に一名づつ合計二名としてあるが、其の後年代により場所及び人員に變更が行はれた。

次には司譯院に於ける譯學官採用の試験法である。先づ其の員數からいふと、「經國大典」以來初試に倭學四名、覆試に倭學二名と規定してある。但し「續大典」には初試覆試とも幾分の増員をなして居る。次には譯科の寫字（譯書即ち解釋讀方の科目は漢學にのみ見居る）の試験である。世宗十二年詳定所の啓によると、譯學倭訓には

消息。 書格。 伊路波。 本草。 童子教。 老乞大。 議論。 通信。

庭訓往來。 鳩養物語。 雜語。

の十一種と規定してあるが、「經國大典」になると、初試覆試とも

伊呂波。 消息。 書格。 老乞大。 童子教。 雜語。 本草。 議論。

通信。 鳩養物語。 庭訓往來。 應永記。 雜筆。 富士。

の十四種を課して居る。つまり「經國大典」に於ては以前よりも「應永記」「雜筆」「富士」の三者を増加したことになる。此等の書中には今日其の名すらも明かならざるもの多く、縦し一二内容の分つて居るものがあつたにしても、語學の學習書としては到底其の目的を達することの出來ぬものが多いのであるから、後世追々改良せられるやうになつたのは當然の話である。即ち此等の書は康熙十七年に至つて全廢せられ、「捷解新語」(康熙聖著、康熙十五年開板)を以て代へられ、其の後最近に至るまで、該書及び「改修捷解新語」「重刊捷解新語」等を用ひ、又「捷解新語文釋」等の書をも讀習したのである。又譯語即ち翻譯の試験としては初試覆試とも初は「經國大典」であつたが、「六典條例」には「大典會通」ときめてある。

次には司譯院で教育する倭學生徒の數である。これは本院と地方との二つに分けることが出来る。先づ本院では「經國大典」以來四學合せて八十名中倭學が十五名であつたが、康熙三十八年預差生徒合計百二十四名中倭學二十五名を置いた。又地方に於ける譯科生徒の數は「經國大典」以來釜山、薺浦に十名、塩浦に六名であつたが、「大典通編」に於ては薺浦、塩浦の二箇所を廢し、更に之に代へて濟州に十五

名、巨濟に五名を置いた。

又司譯院以外に偶語廳なるものがあつた。これは倭、漢、蒙、清の四學に關することを教授した所で、康熙二十一年閔廣の設立にかゝり、四學の年少有才者を選んで、之に入學せしめたものである。而して其の員數總計百名中倭學が二十名であつた。最初日本語の教授に當つたものは朴再興と安愼徽とであつて、五年の間毎日熱心に語學を講習し、成績大いに見るべきものがあつた。然るに其の後良師相繼いで歿し、一時斯學の衰頽を來したが、乾隆六年に至り、更に之を回復し、三十人に増員した。

年少聰敏

其の他、年少聰敏とて、年少者中將來ある者若干を選び、使節の日本又は支那に赴く際、隨行せしめて正確なる外國語を學習せしめたものがある。漢語を研究せしむるために此等を北京に送つたのは世宗十五年頃に始まつたやうであるが、日本に遣はされたのは遙かに後であるらしく、員數も不明であるが、『通文館志』などには十五名と規定してある。

朝鮮に於ける諸制度は『經國大典』以來最近に至るまで殆んど千篇一律、何等著

甲午の大革新

中興公院

韓國語學校

漢城外國語
學校

しい變化を認めなかつたのであるが、李太王三十一年（明治十七年）甲午の大革新により殆んどあらゆる制度が改革せられた。従つて從來あつた司譯院の如きも當然消滅し、語學の専門家としては、外部參謀部、教育部、武官學校等に繙譯官又時として繙譯官補を若干名づつ置く位に止まつた。又語學生養成を目的とせる學校としては、曩に李太王二十四年（明治十年）に育英公院なるものを設け、辦理司務司籤等の官を置いた（増補文獻備考）。其の後同太王三十二年（明治十八年）に外國語（日、英、法、佛、露、亞、俄）漢（支那）德（獨逸）學校を設けたが、後にはそれが漢、城、外國語學校に變じ（當時本校以外語學校、仁川日語學校、平壤日語學校等の官立學校もあつた）、日語、英語、漢語、法語、德語の諸部を置き、其の中で日語部最も盛況を呈したが、明治四十三年韓國併合の事あるや、其の翌年同校は京城高等普通學校に併合せられ、以て今日に至つたのである。